

Title	『百科全書』の読者にして寄稿者、ジャン=フランソワ・ド・サン=ランベール：『四季』第二歌「夏」の注釈をめぐって
Sub Title	Jean-François de Saint-Lambert, lecteur et collaborateur de l'Encyclopédie : autour d'une note sur "l'Été" des Saisons
Author	井上, 櫻子(Inoue, Sakurako)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2012
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.103, (2012. 12) ,p.133(130)- 148(115)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川口順二教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01030001-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『百科全書』の読者にして寄稿者、 ジャン＝フランソワ・ド・サン＝ランベール ——『四季』第二歌「夏」の注釈をめぐって——

井上 櫻子

今日のフランス文学研究において、ナンシー生まれの詩人、ジャン＝フランソワ・ド・サン＝ランベール (1716–1803) の功績に光が当てられることはきわめてまれであり、その名は18世紀を代表する思想家たちの自伝において——しかも、その色恋沙汰において——言及されるにとどまっている。まず、ヴォルテールからその愛人、シャトレ夫人を永遠に奪ってしまった人物として¹。次に、ジャン＝ジャック・ルソーの恋敵として²。

しかし彼は、1769年に発表した『四季』をもって描写詩というジャンルを確立させるなど、18世紀フランス文壇で大きな役割を果たした人物である³。サン＝ランベールが同時代の文人たちに高く評価されていたことは、『四季』公刊の翌年、アカデミー・フランセーズ会員に選ばれていることから明らかであろう⁴。詩作に対するサン＝ランベールの姿勢からは、アンシャン・レジーム期における文学創造の典型的な特徴がはっきりとみとれる。本論考では、『四季』第二歌「夏」の注釈にほどこされた加筆に注目しながら、この詩人の創造行為の特徴を明らかにしたい。

1. 『四季』第二歌「夏」への加筆とコントラストの美学

詩人の同郷人にして最大の庇護者であったグラフィニー夫人によると、サン＝ランベールは、青年期よりさまざまなジャンルのうちでもとりわけ韻文の制作に強いこだわりをみせると同時に、作品の公表にあたってはき

わめて慎重な態度をとったとされる⁵。実際、季節の変遷とともに姿をかえる自然の諸相とその中に生きる人間のさまざまな情緒の経験を歌った代表作『四季』は、30年近くにわたる作者の試行錯誤から生まれた作品である。そして、かくも長い期間にわたり推敲に推敲を重ねたにもかかわらず、サン＝ランベールは初版出版後も自らの作品に加筆修正をほどこし続けた。つまり彼は、『四季』「序文」の結びにおける次のような主張を誠実に守ったと言えるのである。

この作品を完成させたのは5、6年前のことだが、もしそのできばえに満足していたなら、もっと早く公にさせていただこう。この作品を世に問おうと決めてからというもの、大変念入りに手を入れた。しかし、もし真の美についてより確信がもてるようになったら、おそらくさらに手を加えることだろう⁶。

『四季』のさまざまな版をつきあわせてみると⁷、サン＝ランベールは晩年にいたるまでこの作品に筆を入れ続けていること、なかでも1771年に公刊された第三版にもっとも多く修正をほどこしていることが明らかになる。

とりわけ入念な推敲がなされた詩句の一つとして、第二歌「夏」に挿入された太陽の威力に関する一節が挙げられる。季節は太陽が蟹座の位置から獅子座の位置に移る頃⁸とあるから、すなわち7月下旬であろう。初版では、サン＝ランベールは「暑さは身も心を打ち負かしてしまう」⁹がゆえに、「すべては生気を失い、身をこがし、微動だにせず、日の光のみ／自然の中でただひとつ、運動を続けている」¹⁰と真夏の太陽が発するなかば破壊的なエネルギーを讃えた後、即座に山上から滝のように流れ落ちる急流のイメージや小暗い森のイメージを喚起させて¹¹、夏の自然のタブローに熱気と涼感の対比をつくりだそうとしている。1771年に出版された改訂版においても、詩人はこの対比の枠組みをくずしてはいない¹²。改訂版においてサン＝ランベールが目指したのは、灼熱の太陽のイメージを充

実させることであった。すべてを焼き尽くす天体の絶大な威力を伝えるべく、詩人はヨーロッパの夏の大地を描くに飽き足らず、赤道直下の自然へとまなざしを向ける¹³。そして、ただ太陽の盛んな活動を歌い上げるのみならず、ココヤシ、パイナップル、ゴールドデンシャワー・ツリーといった熱帯産の樹木を描いてエギゾチックな雰囲気をつくりだしたり¹⁴、ゾウやライオン、トラのような猛獣を登場させたりして¹⁵、自然の驚異を読者の目の前に提示してみせようとするのである。結果として、120詩行が新たに加えられることとなったが、これは改訂版においても他に類を見ないような大幅な加筆である。

夏の太陽に関する一節に、サン＝ランベールがこれほど念入りに手を入れようとしたのは、自ら提唱する「コントラストの美学」を実践した詩句であるからに他ならない。「序文」において彼は、自然描写に巧みに「コントラスト」を織り交ぜる必要性を説いている。なぜなら詩句の中に「うまく配置されたコントラスト」は、「大きな喜び」を読者に与えるからだというのである¹⁶。そして、読者に快を与える自然のコントラストの典型例として詩人自ら挙げているのが、まさしく「夏」に歌われる熱気と涼感のコントラストなのである。

酷暑を描いた後に、水辺や涼しく小暗い森を描いてみるがよい。読者はよろこんであなたに従い、あなたの描く木陰へと続くことだろう。読者はよろこんであなたとともに焼け付く太陽の炎と乾いた大地から逃れようとするだろう¹⁷。

読者が快楽を覚えるのは、「新鮮な感情」、「新鮮な感覚」を得たときである¹⁸。そして、そのような「新しい刺激」を与えてくれるものこそ、コントラストの美学に立脚する詩句に他ならない。読者の心を惹き付けるには、常にその感受性を揺り動かさねばならない——これこそ、サン＝ランベールの詩作を支える信念となっているのである。灼熱の太陽に関する一節は、サン＝ランベールが提唱するコントラストの美学の有効性を読者に

知らしめるという重要な役割を担っている。さらにまた、この真夏の太陽のタブローを充実させることは、彼の先駆者トムソンから距離を置くためにも必要不可欠であった¹⁹。実は、サン＝ランベール自身が「夏」に添えた注釈で明らかにしているとおおり²⁰、太陽の偉大な力への讃歌はトムソンに想を得たものであった。トムソンを範としつつも、決してそのエピゴーネンに墮することがないよう、サン＝ランベールは自ら保持する美学に依拠しつつ、灼熱の夏に関する一節にことのほか入念な加筆修正をほどこしたと考えられる。

ところで、1771年版に加えられた赤道直下の自然のタブローには、気候と政体の関係に関する注釈が付されている²¹。すなわち、温暖な南国に生活する民族と寒冷な北方の民族の気質の差異と、それに応じた政体についての議論である。この問題を論じた18世紀の著書として名高いのは、言うまでもなくモンテスキューの『法の精神』である²²。実際、この「夏」の注釈の結びにおいて、詩人は自らモンテスキューの名を挙げ、この思想家に着想を得ているかのようにふるまっている²³。しかし、モンテスキューの論に対するサン＝ランベールの見解は、きわめて両義的である。

どのような気候のもとにおいても、世俗の制度や宗教的制度が国家の性格を変えたり、方向付けたりすることができるというのは承知だ。しかし、それは同じ法や手段によってなされるものではないだろう。これは、モンテスキュー部長評定官の考えであり、その気候の影響力に対する考えを人々は非難したが、その非難の仕方はあまりにも軽率であり、かつあまりにも手厳しいものであった。この立法者の導き手の欠点を見つけてはならないということはなかるうが、また同時に、その叡智に敬意を表すると同時に、その意図を賞賛する必要があるのだ²⁴。

ここでいくつかの疑問が浮上してくる。素朴な田園生活を賞賛することを目的とした作品の中に、なぜ本論からやや逸脱するような形で、サン＝ラ

ンベールは気候と民族(あるいは国家)の性格についての政治的考察をのべているのか。なぜ唐突にモンテスキューを擁護するような振る舞いを見せているのか。そして最後に、サン＝ランベールはモンテスキューの見解を全面的に受け入れようとしているのか。

2. 『四季』に展開される気候と政体についての議論と『百科全書』の項目「立法者」

「夏」の注釈に展開される気候と政体についての議論は、おもに南方の民族と北方の民族の生活様式の違いをめぐる展開される。たしかにモンテスキューも『法の精神』第3部第14巻第2章において、暑さや寒さが神経や体液に与える影響をもとに、南方の民族と北方の民族の気質の違いを説明しようと試みている²⁵。肉体組織が外界から受ける刺激に着目している点において、この問題に対するサン＝ランベールとモンテスキューの取り組み方は似通っているように見える。しかし、モンテスキューは、南方の民族と北方の民族の違いを取り上げながら、暑さや寒さが神経に与える刺激と情念との関連を考察するにとどまっているのに比して、サン＝ランベールは外界の自然が人間に与える影響について、より深く考察を掘り下げている。

ここで思い出したいのは、サン＝ランベールが『百科全書』第9巻に収められた項目「立法者」の執筆者だということである。そして、『四季』の注釈と項目「立法者」を比較検討すると、サン＝ランベールはモンテスキューの著作を参照したというよりもむしろ、みずから『百科全書』に示した解説を引き写す形で気候が政体に与える影響について議論を展開しているのが明らかになる。この問題におけるサン＝ランベールの主たる論点は、食物への欲求、労働の必要性、思考様式の3点である。2つのテキストの対応関係をより明確にするため、以下、原文と日本語訳を併記しながら検討を進めてゆきたい。

「夏」の注記において、まずサン＝ランベールは食物への欲求という点において、北方の民族と南方の民族との間に顕著な差があるとしている。

Dans les pays du Nord le peu de substance des aliments, et peut-être la chaleur concentrée dans le corps de l'homme par le froid extérieur font sentir beaucoup le besoin physique de la faim.

La nature fournit en abondance des aliments aux Peuples du Midi, et il leur faut peu parce que ces aliments ont beaucoup de substance.

北方の国々においては、食料が少ないためか、外気が寒いために人間の体内に熱が集中するためか、人は空腹という身体的欲求を強く感じる。

自然は南方の人々には潤沢に食料を与えており、彼らは食料をあまり必要としない。というのも、南方の食料は滋養豊かだからだ²⁶。

この一節は『百科全書』の項目「立法者」の次のような解説と対応している。

Les peuples du nord ne reçoivent pas comme les peuples du midi, des impressions vives et dont les effets sont prompts et rapides. La constitution robuste, la chaleur concentrée par le froid, le peu de substance des aliments font sentir beaucoup aux peuples du nord le besoin public de la faim.

北方の民族は、南方の民族とは違って、すばやく影響を与えるような強い印象を外界から受けることはない。強健な体軀を有するためか、寒さのために熱が集中するためか、食料が少ないためか、北方の民族は、みなひとしなみに空腹という欲求を強く感じる²⁷。

Les peuples du midi ont besoin d'une moindre quantité d'aliments, et la nature leur en fournit en abondance ; la chaleur du climat et la vivacité de l'imagination les épuisent et leur rend le travail pénible.

南方の民族が必要とする食料はもっと少ない。自然が潤沢に与えてくれるからだ。暑い気候、そして旺盛な想像力のために疲れ果ててしまうので、彼らは労働を苦痛だと感じてしまう²⁸。

続いて「夏」の注記では、南方の民族と北方の民族では労働意欲に顕著な差が認められるとされる。

Dans les pays du Nord il faut beaucoup d'industrie pour se vêtir et se loger de manière à ne pas souffrir les rigueurs du froid.

Dans le Midi, pour se garantir de la chaleur, il ne faut que des arbres, un hamac et du repos.

北方の国々では、厳しい寒さに悩まされることのないよう、衣服に身を包み、居を構えるために大いに働かなくてはいけない。

南方では、暑さから身を守るには、木々とハンモックと休息の地だけで事足りる²⁹。

極寒の地に生を営む北方の民族は自己防衛のために労働が必要であるが、満ち足りた世界にひたる南国の人々は働く必要にはせまられないという議論は、やはり『百科全書』の項目「立法者」にほぼ同じ表現を用いて展開されている。

Il faut beaucoup de travail et d'industrie pour se vêtir et se loger de manière à ne pas souffrir de la rigueur du froid ; et pour se garantir de la chaleur il ne faut que des arbres, un hamac et du repos.

厳しい寒さに悩まされないためには、衣服に身を包み、居を構えるために大いに働かなくてはいけないが、暑さから身を守るには、木々とハンモックと休息の地だけで事足りる³⁰。

このち、「夏」の注釈においても、『百科全書』の項目「立法者」においても、北方の民族が寒さに備えるべく労働にいそむさまと、南方の民族が怠惰な生活を過ごす様子が具体例をもって示される³¹。北方民族の例としては、現ロシア北部のツンドラ地帯に住むサモエド族が挙げられ、彼ら

が狩りをし、洞窟を掘り、暖をとるため、そして温かい飲み物を準備するための薪を手に入れたり、身を包むための毛皮を用意したりと厳しい気候条件に対処すべく腐心する様子が描かれる。これに比して、南方の民族の例として挙げられるアフリカの未開人は、泉でのどを潤し、果物を摘み、木陰で眠ったり踊ったりと享樂的な生を謳歌するとされている。

このような生活様式の相違から、当然の帰結として南方と北方の民族の間には、思考様式の違いも生じる。「夏」の注記ではまず、南方の民族は、外界から受ける心地よい感覚に身を委ね、その身体も精神も休息状態にあることが多いとされる³²。すなわち、自然の事物すべてがほほえみかけているような温暖な地においては、人は「自分が存在していると感じる *sentir son existence*」³³ ために、理性の働きを必要としないというのである。

Les Peuples du Midi n'ont pas besoin d'inventer beaucoup, de retenir, de combiner un grand nombre d'idées, de là, ils ont peu de suite dans l'esprit et beaucoup d'inconséquence. Ils sont conduits par l'intérêt du moment, ils oublient l'avenir, et sacrifient la vie à un seul jour. Le Caraïbe pleure le soir son lit qu'il a vendu le matin pour s'enivrer d'eau-de-vie.

南方の民族は、多くのものを発明したり、多くの思考を記憶にとどめたり、組み合わせたりする必要がない。したがって、彼らの考え方は筋道が立っておらず、刹那的な興味によって突き動かされ、未来のことを忘れ、たった一日のために人生を棒に振るのである。カリブ族は、蒸留酒に酔いしれるために、朝寝具を売ってしまったことを夕方には悔やんで涙するのである³⁴。

この一節は、『百科全書』「立法者」の以下の一節に若干の修正を加えたものである。以下の一節に現れる「*par le moment*」は「夏」では「*par l'intérêt du moment*」に、そして「*ils oublient le temps*」は「*ils oublient l'avenir*」と変更されているが、このような細部の修正により、作者の意図はより明確になっていると言えるだろう。

La vivacité de chaque impression, et peu de besoin de retenir et de combiner leurs idées, doivent être cause que les peuples méridionaux auront peu de suite dans l'esprit et beaucoup d'inconséquences ; ils sont conduits par le moment ; ils oublient le temps, et sacrifient la vie à un seul jour. Le caraïbe pleure le soir du regret d'avoir vendu le matin son lit pour s'enivrer d'eau de vie.

外界から受ける一つ一つの感覚が生き生きしており、観念を記憶にとどめたり、組み合わせたりする必要がほとんどないので、南方の民族の考え方は筋道が立っておらず、著しく一貫性に欠けている。彼らは利那的に行動し、時を忘れ、たった一日のために棒に振るのである。カリブ族は、蒸留酒に酔いしれるために、朝寝具を売ってしまったことを夕方には悔やんで涙するのである³⁵。

自然の恩恵に浴しながら、いささか軽率と思われるほどにそのときどきの欲求に身を任せる南方の民族とは対照的に、北方の民族は自己保存のため常に理性的な生活を送らざるをえない。

Les Peuples du Nord ont besoin de combiner beaucoup d'idées, d'avoir de l'industrie et de l'invention, ils doivent avoir plus de suite et de force d'esprit, plus de raisonnement et de raison. Ils doivent avoir plus de persévérance dans les passions, un caractère moins souvent interrompu.

北方の民族は、多くの観念を組み合わせ、器用さと発明の才を備える必要がある。考え方の一貫性、精神力、論理性、理性がよりいっそう必要である。より粘り強く、気質にむらがあってはいけない³⁶。

この「夏」の一節もまた、基本的には『百科全書』の項目から以下の一節をそのまま援用しつつ、その言葉足らずな面を補足して整えたものであるのは明白である。

On doit dans le nord, pour pourvoir à des besoins qui demandent plus de combinaisons d'idées, de persévérance et d'industrie, avoir dans l'esprit plus de suite, de règle, de raisonnement et de raison.

北方では観念をしっかり組み合わせる能力や、我慢強さ、器用さをより必要とするような欲求を満たすため、人々の精神には一貫性、秩序、論理性、理性が不可欠である³⁷。

つまり、気候と政体の関係を論じた「夏」の注釈は、モンテスキューの擁護を主目的としたものではなく、むしろこの問題について、詩人が持論を展開する場として機能していることが分かる。さらに、そこに展開される感受性論に注目すると、一見したところ自然の讃歌の中で脱線のようにも映るこの「夏」の注記が、サン＝ランベールの人間論を色濃く反映していることが明らかになるのである。

3. 『百科全書』の項目「方法」とデイドロの感覚論的人間論の影響

ここで南方の民族の思考様式を解説した一節に立ち戻ってみたい。「夏」の注記の中で、サン＝ランベールは、次のように語っていた。

[南方では] 身体と精神は休息 « repos » する傾向にある。そこでは人は行動を通して自分が存在するという感覚を得よう « sentir son existence » とはしない。それよりも、物理的感覚 « sensations » に身を委ねて、多くの心地よい感覚を享受するのだ³⁸。

温暖な南方の地においては、精神の積極的な働きを必要とせず、ただ外界から受ける心地よい感覚を楽しむだけで、自己存在感を享受することができる。この議論には、やはり「夏」の注釈群の一つで展開される、暑さが感受性に与える影響についての考察との連続性がはっきり認められる。

暑さは、健康で（自己存在に固執する）努力³⁹を払う必要がまったくない身体においては、喜びと同じように神経と筋肉をゆるやかに弛緩させて、精神に心地よい状態、幸福を味わわせる。精神はそのことをよく理解するのだが、そのようなときには、単なる存在 « *la simple existence* » だけで幸福であり、「私は存在する。ゆえに幸福である」と思うことができるのである。そのようなときにこそ、木陰で、涼やかな草むらで、燃えるような夏の暑さをやわらげながらも、やはりその暑さをどこかに感じさせるような水辺で、精神は夢にふけり、心は満ちたり、感官は安らいだ状態で、人はしばしの間、至上の喜びに続く休息と同じような甘美な休息 « *repos délicieux* » を享受するのである⁴⁰。

「暑さ」という外界からの刺激は、「喜び」という内面的な感情と同じような刺激を「神経」や「筋肉」といった肉体組織に与えるという主張からは、感覚と感情の起源を等しく筋肉や神経への物理的刺激に求めようとするサン＝ランベールのあり方が垣間みられる。つまり詩人は感覚論的人間論を支持しているのであるが、このような感受性論は、彼自身『百科全書』の項目「方法」においてすでに展開していたものである⁴¹。実際、『四季』初版に組み込まれている同じ注記の中で、サン＝ランベールは、『百科全書』の項目「方法」の一節を引用しながら、『四季』に展開される物理的刺激と感情との関連性についての議論が、『百科全書』に提示された解説の延長線上にあることを明示している⁴²。さらに、サン＝ランベールは、程よい暑さを感じながら楽しむ「甘美な休息 « *repos délicieux* »」を、「至上の喜び」すなわち、肉体関係を持ったあとの「休息」になぞらえているが、この表現をもって、詩人は読者をデイドロの筆になる『百科全書』の項目「甘美 « *Délicieux* »」へと送っていると思われる。なぜなら、デイドロはこの項目の中で、まさしく肉体関係を持ったあとの若者が享受する「甘美な休息 « *repos délicieux* »」について語っているからである。

すっかり魅惑に取りつかれ、脱力しきったこの瞬間、若者には過去の記憶もなければ、未来への欲望もなく、現在についての不安もない。彼にとっては時の流れは止まってしまっている。なぜなら、自分自身だけですっかり完結して存在しているからである。幸福という感情が弱まれば、存在するという感覚も必ず弱まる⁴³。

幸福という感情が自己存在感と表裏一体をなしている、あるいは存在するという感覚が幸福の源となっているというディドロの解説は、「夏」の注記に認められる「私は存在する。ゆえに幸福である」という一節と対応している。そしてまた、自己充足感を味わう若者は、時の流れを忘れ、不安から解放されているという『百科全書』の項目の一節は、サン＝ランベールの定義する南方の民族の特質——外界から受ける心地よい感覚にすっかり身を委ね、「自分か存在しているという感覚」を楽しみ、未来のことをすっかり忘れて、その瞬間ごとの関心につきうごかされるという特質——とも結びつけられる。つまり、サン＝ランベールは、ディドロの強い影響下に感受性と快楽についての議論を展開しているのである。感覚論的人間論に基づきながら人間の様々な情念を歌に詠もうというサン＝ランベールの企図は、『四季』の初版からすでに「序文」で明示されていたものである⁴⁴。しかし、1771年に出版された改訂版では、サン＝ランベールは「序文」に加筆をほどこして、詩のリズムは自己存在感、すなわち幸福を強く人々に感じさせると主張し⁴⁵、危機に瀕していた韻文というジャンルを擁護するとともに、自己存在感を人間の根源的快楽であると強調している。したがって、気候と政体の関係を論じた「夏」の注記は、モンテスキューの弁護を目的としているというよりもむしろ、一貫してディドロの感覚論的人間論に依拠しながら事物の本性を解き明かそうとするサン＝ランベールの意志を読者に再認識させる役割を担っていると言える。つまり、一見唐突に見える気候と政体についての注釈は、『百科全書』の擁護という『四季』出版時のサン＝ランベールの目的——この作品を締めくくる「冬」の注記に明示されている⁴⁶——に合致しているのである。『四季』は、『百科

(126)

全書』の本文完成から数年後に発表された作品である。したがってこの作品は、サン＝ランベールにとって、百科全書派に与するという思想的立場を示すと同時に、自ら寄稿している大百科事典の有用性を強調するのにきわめて有効な媒体であったと考えられるのである。

* * *

気候と政体の関係を論じた「夏」の注記は、熱気と涼感のコントラストをきわだたせようとするサン＝ランベールが、改訂版において赤道直下での太陽の威力と熱帯における自然の驚異を描いた詳細なタブローを組み込んだのにもない、加えられたものである。そもそもサン＝ランベールが灼熱の太陽を歌った詩句においてコントラストの美学を究めようとしたのは、ディドロが『四季』初版刊行直後に、『文芸通信』において否定的な見解を提示したからにほかならない。ディドロは、サン＝ランベールが真夏の太陽の威力を歌った後に、涼やかな急流を描き出しているのを取り上げて、「この（涼気の）コントラストは崇高だが、詩人は一瞬しかそれに身を委ねるべきではなかった」⁴⁷と評している。詩人はディドロのこのような批判を意識しながら、熱気と涼気のコントラストにメリハリをつけようと赤道直下の地を描く詩句を充実させたのではないかと考えられる⁴⁸。

『四季』において、サン＝ランベールはディドロの強い影響のもと感受性と快樂についての議論を展開している。のみならず、詩人は『四季』に手を入れるにあたり、数々の書評の中でもディドロのコメントを強く意識し、その意見を修正稿において忠実に反映させようともしている。その点において、『四季』の制作過程はちょうど『百科全書』の項目「天才」⁴⁹が二人の共同執筆のように映るのにも相通じる面がある。この項目の執筆者は、『四季』の作者と同様、人間が外界からうける物理的感覚に注目しながら精神のメカニズムを説明づけようとしている。

世界に投げ込まれた人間は、万物についての観念を、程度の差こそあ

れ、物理的感覚とともに受け取る。たいていの人の場合、鮮烈な物理的感覚は、自分の欲求や好みに直接関係がある事物の印象からしか受けることはない。(中略) 天才とは、その幅広い精神を有し、あらゆる物から受ける物理的感覚に敏感に反応する人である⁵⁰。

「天才」という項目の執筆者同定——ディドロか、サン＝ランベールか——をめぐっては、さまざまな議論が展開されてきたにもかかわらず、いまだ十分納得のゆく結論が得られていない⁵¹。この事実は、一つのテキストは一人の書き手と緊密な紐帯で結ばれていると考えがちなロマン主義以降の読者の手によってはすくいとることのできない、アンシャン・レジーム期独特の文学創造のあり方が確かに存在することを象徴的に表していると言えよう。すなわち、一つの文学作品は、作者が自らの心の声に耳を傾けることによって紡ぎだされるのではなく、作者と読者のたえざる対話から生まれるということである。

付記：本研究は、平成24年度文部科学省科学研究費補助金・若手研究(B) (課題番号23720180) の助成を受けたものである。

註

- 1 *Ibid.*, pp. 57-73.
- 2 *Ibid.*, pp. 135-153.
- 3 サン＝ランベールの生涯と主要作品については、以下の著作に簡潔にまとめられている。Roger Poirier, *Jean-François de Saint-Lambert (1716-1803). Sa vie, ses œuvres*, Sarreguimines, Éditions Pierron, 2001.
- 4 *Ibid.*, pp. 205-215.
- 5 M^{me} de Graffigny, *La Correspondance de M^{me} de Graffigny*, à Devaux, le vendredi 3 avril, 1744, Oxford, The Voltaire Foundation, t. V, 1996, n^o. 676, pp. 185-187.
- 6 Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Discours préliminaire », 1769, p. xxviii.
- 7 本論考の執筆にあたっては、以下の版を参照した。Saint-Lambert, *Les Saisons. Poème*, Amsterdam, 1769 ; Saint-Lambert, *Les Saisons. Poème*,

- Amsterdam, 1770 ; Saint-Lambert, *Les Saisons. Poème*, 3^e édition corrigée et augmentée, Amsterdam, 1771 ; Saint-Lambert, *Les Saisons. Poème*, 5^e édition, Amsterdam, 1773 ; Saint-Lambert, *Les Saisons. Poème*, 7^e édition, Amsterdam, 1775 ; Saint-Lambert, *Les Saisons. Poème*, Amsterdam, 1777 ; Saint-Lambert, *Les Saisons. Poème*, Londres, 1782 ; Saint-Lambert, *Les Saisons. Poème*, nouvelle édition, Paris, Pissot, 1785 ; Saint-Lambert, *Les Saisons. Poème*, Rouen, J. Racine, 1787 ; Saint-Lambert, *Les Saisons. Poème*, Paris, Paris, Didot l'aîné, 1795 ; Saint-Lambert, *Les Saisons*, Paris, Didot l'aîné, 1796.
- 8 Saint-Lambert, *Les Saisons*, « L'Été », 1769, p. 52 ; Saint-Lambert, *Les Saisons*, « L'Été », 1771, p. 59.
- 9 Saint-Lambert, *Les Saisons*, « L'Été », 1769, p. 53.
- 10 *Ibid.*, 1769, p. 54
- 11 *Ibid.*, pp. 54-55.
- 12 Saint-Lambert, *Les Saisons*, « L'Été », 1771, p. 59-60 et p. 65.
- 13 *Ibid.*, pp. 60-65.
- 14 *Ibid.*, p. 61.
- 15 *Ibid.*, pp. 61-62.
- 16 Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Discours préliminaire », 1769, p. xvii.
- 17 *Ibid.*
- 18 *Ibid.*
- 19 トムソンに対するサン＝ランベールの敬愛の念と、対抗意識は『四季』「序文」にはっきりと示されている。Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Discours préliminaire », 1769, pp. xxvi-xxvii.
- 20 Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Été », 1769, p. 83.
- 21 Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Été », 1771, pp. 94-96.
- 22 Montesquieu, *De l'Esprit des lois*, dans *Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, « la Bibliothèque de la Pléiade », édition de Roger Caillois, t. II, 1951, Troisième Partie, livre XIV, pp. 474-489.
- 23 Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Été », 1771, p. 96.
- 24 *Ibid.*
- 25 Montesquieu, *De l'Esprit des lois*, dans *Œuvres complètes*, t. II, Troisième Partie, livre XIV, chap. 2, pp. 474-477.
- 26 Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Été », 1771, pp. 94-95.
- 27 Saint-Lambert, « Législateur », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, p. 357 (強調は論者による)。
- 28 *Ibid.*, p. 358 (強調は論者による)。

- 29 Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Été », 1771, p. 95.
- 30 Saint-Lambert, « Législateur », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, p. 358 (強調は論者による)。
- 31 Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « L'Été », 1771, p. 95 ; Saint-Lambert, « Législateur », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, p. 358.
- 32 Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Été », 1771, p. 95.
- 33 *Ibid.*
- 34 Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Été », 1771, pp. 95-96.
- 35 Saint-Lambert, « Législateur », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, p. 358 (強調は論者による)。
- 36 Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Été », 1771, p. 96.
- 37 Saint-Lambert, « Législateur », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, p. 358 (強調は論者による)。
- 38 Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Été », 1771, p. 95.
- 39 文脈から判断すると、サン = ランベールはここで、スピノザの用語を踏襲していると思われる。スピノザ哲学において、「努力」とは、自己存在、自己保存に固執する力のことを指す。
- 40 *Ibid.*, pp. 90-91.
- 41 Saint-Lambert, « Manière » dans l'*Encyclopédie*, t. X, p. 35.
- 42 Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Été », 1769, pp. 79-80.
- 43 Diderot, « Délicieux », dans l'*Encyclopédie*, t. IV, 1754, p. 784.
- 44 Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Discours préliminaire », 1769, pp. xiii-xiv.
- 45 Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Discours préliminaire », 1771, p. x.
- 46 Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Hiver », 1769, p. 179 ; Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « l'Hiver », 1771, p. 216.
- 47 *Correspondance littéraire*, 1769, 15 février, t. VIII, p. 287.
- 48 サン = ランベールがデイドロの批評を意識しながら『四季』の詩句に手を加えていく過程については、以下の拙稿ですでに紹介している。「Un dialogue entre Saint-Lambert et Diderot — étude génétique des *Saisons* », dans *Comment naît une œuvre littéraire ? Brouillons, contextes culturelles, évolutions thématiques*, Paris, Honoré Champion, pp. 55-69.
- 49 « Génie » dans l'*Encyclopédie*, t. VII, pp. 582-584.
- 50 *Ibid.*, p. 582.
- 51 R. N. Schwab et W. E. Rex Lough, *Inventory of Diderot's Encyclopédie*, t. III, SVEC 85, Oxford The Voltaire Foundation, 1972, p. 471 ; François Moureau, « Le manuscrit de l'article ou l'atelier de Saint-Lambert », dans *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, n° 1, 1986, pp. 71-84.